瓦谷山

瓦谷山だより

vol.23

発行日 2013年7月吉日
発行人 （宗）真光寺
岡本和幸
印 刷 現代社
編 集 （宗）真光寺

問い合わせ先
（宗）真光寺
TEL 0438-75-7414
○お寺HP
http://www.shinko-ji.jp/
○上総自然学校HP
http://www.shinko-ji.jp/satoyama/
○お寺ブログ【瓦谷山たより】
http://sinkoji.cocolog-nifty.com/news/

ごあいさつ

「喉元過ぎれば熱さ忘れる」という言葉のように、東日本大震災も、原子力発電所の事故も、すっかり過去の出来事になってしまったようです。一時期やたらと謳われた「絆」という言葉もどこかに飛んで行ったのか、見かけることはほとんどなくなりました。「阪神淡路大震災の時は一年で忘れられたが、今回はより大規模な災害だから三年は忘れないだろう」と言われていましたが、被災された方がたに対する関心も、残念ながら二年を過ぎたあたりから次第に薄れつつあるようにも思います。実際の現場は復興に向けようやく動き出したところであり、原発事故の方は、依然先の見えない苦しい状況にあります。

福島県田村市の寺院住職の友人は、依然家族を郡山市に疎開させたまま、高線量の地域に一人住んでいます。檀信徒の多くは避難生活を送り、故郷に帰れない状況が続き、住むことができる地域においても、被爆の不安と隣り合わせの生活となってしまっているそうで、事故後、檀信徒は減少の一途であり、お寺の存続もままならないと嘆いています。天災であれば諦めざるを得ない部分もあるかもしれませんが、もともと自然災害が多く、国土も限られた我が国が、原子力に頼って経済成長を狙った所に問題があったと思えてなりません。唯一の被爆国として原子力の怖さを十分知っていながらも、これほどの悲惨な事故を引き起こしたのですから、どう考えてみてもこれは完全な人災であると思います。

私たちも安価な電気の安定供給によって、長らく便利な生活を享受してきました。仏教の考え方でいえば、これは私たちが積み重ねた業（ごう）ということになります。地球温暖化防止のための二酸化炭素排出量の削減や、さらにはこれまでの設備投資の回収など、様々な問題を避けて通れないことも理解できますが、放射性物質の処理の問題をどうするのか、まだはっきりとした答えが出ていません。人間の寿命は長くても百年ですが、百万年後の子孫にまで危険を残す原子力発電が正しい行い（＝業）であるとはどうしても思えないのです。

原発だけではありません。東京湾岸の工業地帯を始め、全国各地に劣化ウランが多数放置されているそうです。この劣化ウランに火が付き、微粒子となって空中に飛散すれば、吸い込んだ人は内部被曝をすることになります。厳重に保管しているから火はつかないと管理者は言いますが、津波の後も長い間燃えていた気仙沼の海を思えば、安全神話を信じる気には到底なれません。欲と便利さの追求をこれまで通り続ける限り、住み慣れた地を放棄し、幾世代にもわたって内部被曝の恐怖にさらされる恐怖と隣り合わせで生きていかなければならないのです。私たちの未来が暗澹たるものになる前に、過去を大切に、未来に責任を持ち、自然に対し恐れと畏敬の念を持っていた、本来の日本の宗教のありようを見直すべきではないかと思います。

実にささやかなことですが、真光寺も庫裡の屋根に一六キロワットアワーの太陽光発電パネルを取り付け、小さな発電所となりました。節電を含め、小さなことでも、今、ここでできる努力を一人ひとりが重ねることで、大きな力になります。時間はかかっても、今回の事故を忘れることなく、脱原発の意志を持ち続けて、正しい業を作り続ける必要があると考えます。

本誌には夏から秋にかけての行事案内を掲載しています。ご一読の上、ぜひご参詣下さい。

合　掌

住職　岡本和幸

行事報告

◇縁の会彼岸法要〔三月〕

昨年より始めた縁の会彼岸法要、御詠歌も取り入れ縁の会物故者と、先祖の供養を執り行いました。

◇七日法要〔四月〕

午前は授戒式、午後は年に一度の植樹祭を行いました。初めての方は自分の区画に、二度目三度目の会員さんには第二区画へ桜の植栽をしていただきました。

◇花まつり・檀信徒総会

四月七日、お釈迦様の誕生をお祝いする花まつり法要が行われました。今年から花御堂（誕生佛を安置する小さい御堂）を新調しました。法要後には檀信徒総会・懇親会が行われました。

新調した花御堂、住職右

◇碁縁の会

五月九日より一泊二日で碁縁の会が行われました。これは住職の兼務している、東長寺の囲碁の会の行事ですが、真光寺を会場とし、お寺に到着してからは、思う存分囲碁を楽しむ会です。お寺に泊まるのでもちろん朝の坐禅とお勤めは修行していただきます。

真光寺縁の会の会員さまでも、囲碁のお好きな方はぜひお問い合わせください！

真光寺日記

■首座法戦式

三月六日、東長寺の徒弟（跡継ぎ）の遥風師が真光寺にて首座法戦式を行いました。

『首座法戦式』とは、お釈迦さまがこの世においられた当時、雨季には、歩くだけで多くの生き物を殺生してしまうため、外に出て修行する事ができませんでした。よって、修行僧達が寺に集まるようになったのですが、これを「安居（あんご）」といいます。そして、安居の制を結ぶことを、「結制」とも呼びます。安居は、インドでは雨季のみであり、「雨安居」とも「夏安居」ともいいましたが、中国に伝わると夏冬2回の行持になったといいます。

そして、結制中、自ら修行僧の中に入り、合わせて先頭に立って指導する役職を、「首座（しゅそ）」と呼ぶようになりました。文字通り、修

行僧の中での筆頭であり、住職の隣に坐り、その補佐をしながら修行するため、そう呼ばれたのです。なお、お釈迦さまが霊鷲山においてお弟子の迦葉尊者にご自分の席を半分ゆずって説法を許されたという故事にならって、住職に代わって仏道の肝心なところを、修行僧に説法する儀式が出来ました。そして、徐々にこの儀式が実用的になり、首座と修行僧達とで激しい問答を行うようになりました。この様子を、首座が法を戦わせることから、「首座法戦式（しゅそほっせんしき）」といい、住職になるための一つの節目の行事です。

僧侶約五十名、東長寺檀信徒、首座親族のもと厳修されました。僧侶になるためには必ず通る道です。永平寺日記を寄稿している手島師も近い未来、この法戦式を修行するでしょう。今後の僧侶としての活躍を期待いたします。

禅問答の様子、大声での問いかけに対し、首座遥風師が大声で答える。道場は背筋の伸びるような気迫に包まれました。

■永平寺日記

永平寺日記【三】　掛塔明け～能登祖跡拝登

五月一日の掛塔明けから、私たち八番上山の七名（本来は八名であったが、事情があり一名だけ九番に回ってしまっていた）は、この数日の間で転役（他の部署に移ること）がありそうだということで、決まった公務に付かず非番となり全ての行持に随喜する毎日が続いていた。そんな中、五月七日の小食の終わり頃、維那老師（いのうろうし、修行僧の配役などを司る修行僧の監督者）が僧堂において転役を読み上げ、直ちに永平寺全体の館内放送において「転役告報（てんやくこうほう）」が流された。私は、「小庫院典行兼菜頭（しょうくいんてんなんけんさいじゅう）」という配役となり、直ちに「小庫院」に配属されることとなった。

私と同時に小庫院に転役になる「大泉（だいせん）」と一緒に衆寮当番所で待っていると、小庫院で菜頭長の任に当たっている古参和尚さんが迎えに来てくれ、必要最小限の持ち物を支持され、急ぎ小庫院に向かった。この時点から「公務中」という立場での一週間が始まった。そして同じくこの時点から十月一日の送行（そうあん）まで、一度も転役なく過ごした場所が小庫院となった。

小庫院は、大庫院と同じく永平寺内での食事の準備を司る部署の一つである。大庫院と小庫院はそれぞれが修行僧の食事を作ることを同じくするが、大庫院は禅師様と瑞世で来山された僧侶の食事を作ることを兼ね、小庫院は永平寺に宿泊する一般客の食事を作ることを兼ねるという特色がある。よって私が配属された小庫院は、毎日約百名分の中食（ちゅうじき、昼食）、と薬石（やくせき、夕食）を作り、日毎に人数が違う宿泊客の薬石と小食（しょうじき、朝食）を作ることが主な公務となる。ちなみに修行僧の小食分は全て大庫院が作ることとなっている。

さて配属された私たち二人は、五月七日で正式に小庫院の一員になったわけではない。公務中の一週間で小庫院における基本的な公務を丸暗記し、一週間後に行われる「公務点検」に受かって初めて小庫院の一員となり公務を行うことができる。この公務中が旦過寮と同じように辛い一週間となった。ではどのような辛さだったのかを列記してみよう。

一、起床は午前一時。就寝は二十二時三十分。睡眠時間は差し引き、二時間半！
二、基本的に他の修行僧と会話は厳禁！
三、行うことは最初の三日間が小庫院内、いわゆる厨房の床磨き（ブラシで床を磨く）！
四、後の三日間が鍋磨き！
五、七日間通しで、厨房の器具洗い！
六、飯台の終わった後に三十分だけ与えられる公務帳の暗記！

ざっとこのような感じで毎日が過ぎていった。この間、行持への随喜は一切なしで小庫院から出ることもなく（坐禅もしない）、気分転換もなし。この時ほど「坐禅したい」と思ったことはない。

公務中の最終日は公務点検が行われる。暗記した公務内容を順番に言っていかなければならない。約一時間の点検中、大泉と協力してなんとか点検に合格し、晴れて小庫院の一員となったのである。終わってから一人の寮長から頂いたのが、現在でも大切に使用している、野菜切り包丁だった。小庫院に在籍中ほぼ毎日使用し、かつ毎日砥石で研いだ。

小庫院の毎日は、公務に付くか非番かで大きく異なる。前回の衆寮の項でも書いたように、公務は役目が与えられ永平寺という大きな組織を動かす一人となることから気が抜けず、特に食事を作ることから、おいしいものを作ってあげたいということもあり、一所懸命務めさせて頂いた。また非番になると全ての行持に随喜することから、お経を覚え、徐々に進退もできるようになっていった。

梅雨が去り、夏の盛りになっても、日中のほとんどは冷房が効いている小庫院内にいることから暑さも感じず、快適に過ごすことができた。そしてこの間、様々な経験をすることができた。簡単に列記すると、道元禅師の足跡を辿る、木の芽拝登に行ったこと。石川県と岐阜県に跨る「白山」に登ったこと。永平寺門前で門前の人々と盆踊りを踊ったこと。永平寺の仏殿、承陽殿、法堂（はっとう）で両班（りょうばん）を務めたこと。能登祖跡拝登といって一泊二日の研修旅行に行ったこと、などを挙げることができる。いずれも永平寺から一歩出て、いつもと違う環境に身を置くことができるというありがたい経験をさせて頂いた。このように毎日変わらずの修行生活の中に、スポット的に貴重な体験が入り混じった修行生活を終わりにしようと考えはじめたのは、家族との面会がきっかけだった。「出家」とは、文字通り「家を出る」ということは分かっいたつもりでいた。しかし当時四歳の娘と離れ離れになり、かつそれが電話もできない環境に置かされると自分の心に空いた穴は予想以上に大きかった。七月の二回目の面会の別れ際、娘が号泣したことは一生忘れることがないだろう。妻からは「絶対に泣かないで」と言われていたらしいが、その分溜めに溜めたものがあったのであろう。いつしか自分のことのみであった修行生活に、「家族」という文字が大きな比重を占めるようになってきた。

修行を終えるには師匠である岡本住職の了解が、まずもって必要となる。最初九月の中旬に送行（そうあん、修行を終えて本山を下りること）をするつもりでいたが、師匠からはお叱りの返信があった。「本当に終えていいのか」「後悔はしないのか」「家族は待ってくれる」などなど。そして最後に「おまえが修行に行ったのは何のためなのか」という問いが突き付けられた。「たった半年でそれが何だったのか、分かるのか」という問いかけでもあった。疲れている体であってもこの時期は眠ることができなかった。結局私が修行で得たものは何だったのか。

永平寺での修行は、何も真新しいことを行うことはない。当然初めて経験することは多いが、それが「何かの役に立つ」とか「誰かのため」ということはない。そこにあるのは「ただ修行する」というだけである。では修行とは何なのか。それは「自己」を見つめるということだと気付いたのは、師匠からの手紙がきっかけだった。道元禅師のお膝元である本山で経を唱え、食事を作り、掃除をし、坐り、そして眠る。当たり前のことを当たり前のようにただただ行う。そんな自分の中にどんな「自己」を見つけられるのか。それを探すことが修行だとするなら、本山を下りてからの生活の中にもきっとできることがあるはずだと、思うことができるようになった。師匠は一年はいて欲しいという願いがあったようだが、私は下りることを決心した。

つづく

手島師、前列右端　〈小庫院にて〉

上総自然学校（里山再生活動）

新緑の季節が過ぎ、初夏の陽気と共に緑が濃くなると、里山の活動は一気に活気づいてきます。冬の間は閑散としていた里山も、この季節は多くの人で賑わいます。田植えイベントではおよそ百三十人の方々が田んぼに入り、泥にまみれながらも、手で苗を植えていかれました。笑顔あふれる田植えシーズンとなりました。

左の写真は田んぼ一面レンゲの花が咲き乱れている風景です。昨年の収穫祭イベントにて参加者の皆さんに蒔いてもらいました。レンゲは窒素を多く含むのでこのまま田んぼに鋤き込み、お米の肥料にします。とても美しい、心和む風景です。

焚火で豆腐パン焼き

絹ごし豆腐の入った生地を竹の棒に蒔いてじっくり焼きます。焼き立てが美味しい。

ヨモギ餅作り

春の里山でヨモギを摘んでヨモギ餅作り。里山はヨモギの宝庫。お餅をつく度にもち米がどんどんヨモギ色に染まっていくのがきれい。

お寺ヨガ

4月のお寺ヨガではヨガの後にゴマ豆腐を作りました。40分ほどず～～っと練り続けます。

畦塗

田植えに向けての大切な下準備。畦に泥を塗りつけて水が漏れないようにします。種籾を蒔いて稲の苗作りもしました。田植えがより楽しみになります。

イベント日程

『赤米稲刈り&坐禅体験』◆
・九月一日（日）十三時～十七時

『稲刈り』★
・九月十四日（土）十時～十六時
十五日（日）※各日日帰り

『収穫祭』★
・十月十二日（土）十時～十六時
十三日（日）※各日日帰り

『サツマイモ掘り』☆
・十月二十六日（土）十四時～十六時

『干柿作り』☆
・十一月十六日（土）十三時～十六時

『紫米稲刈り&ヨガ』□
・十一月十七日（日）十三時～十七時

『しめ縄でお飾り作り』☆
・十二月十四日（土）十三時～十五時

〈参加費〉

各イベント名の下にある記号です。

□大人 三千五百円/小学生 二千円
★大人 二千円/小学生 千円
◆大人 千円/小学生 五百円
☆八百円

※未就学児無料
※すべて保険代込

〈申込み方法〉

参加される方の①氏名②住所③連絡先④生年月日⑤血液型⑥緊急連絡先（ご本人様が怪我をした時などの連絡先）を明記の上、メール・ファックス・電話でお申込みください。（連絡先は最後のページに記載があります）

赤米田植え&サツマイモ堀

サツマイモの定植と田植えもしちゃおうという欲張りイベント。どちらも収穫が楽しみです。

泥んこフェア☆

子供は風の子、泥んこの子!泥の感触と大きな泥のプールに大はしゃぎ。子供は本当に元気で,それを見ていた大人もほのぼのとなりました。

田植え

皆さん泥の感触を楽しみながらの田植えでした。『紫米田植え』とヨガでは田んぼを眺めながらヨガをしました。気持ちいい！

観察会

水路の網を入れて生物探し。ヤゴだけでも数種類発見！図鑑でしか見たことのない生物も発見できた！

里山の生物

キ　ジ

キジ目キジ科キジ属の鳥の一種。日本の国鳥。日本の古語では「雉子(きぎす)」

オスは翼と尾羽を除く体色が全体的に美しい緑色をしており、頭部の羽毛は青緑色で、目の周りに赤い肉腫がある。メスは全体的に茶褐色で、尾羽は長い。山地から平地の林、農耕地、河川敷などの明るい草地に生息している。地上を歩き、主に草の種子、芽、葉などの植物性のものを食べるが、昆虫やクモなども食べる。繁殖期のオスは赤い肉腫が肥大し、縄張り争いのために赤いものに対して攻撃的になり、「ケーン」と大声で鳴き縄張り宣言をする。メスは「チョッチョッ」と鳴く。子育てはメスだけが行う。

お米　販売しています！

里山米

【品種】こしひかり
【農薬】いもち病予防の種子消毒。田植から収穫まで田んぼでは農薬は使用していません。
【肥料】有機肥料
【精米】一時間かけて低温で自家精米
【価格】玄米　五百五十円/kg
　　白米　六百円/kg

☆玄米の放射線測定結果（自主検査）
ヨウ素・セシウム134・セシウム137　検出せず
（検出限界値　1ベクレル/kg）
☆収益金は「上総自然学校」の里山再生活動費に充当します。

【ご注文方法】
①氏名 ②住所 ③電話番号 ④白米か玄米 ⑤数量（二キログラム以上）を明記し、ファックス・電話・メールにてお申込みください。（連絡先は最後のページに記載あり）

修証義に学ぶ

真光寺に入って一年半ほど経った、平成七年の九月頃だったと思います。以前本誌上で紹介したこともある、オーストラリアから来たクリス君が真光寺に住みはじめました。私は彼に毎日の朝のお勤めが終わったら、山に入って仕事をするよう言いました。当時の真光寺の裏山は、もとからあった照葉樹林に竹が侵入し、荒れ放題の竹山になっていました。寺の周りが少しでもきれいになって、花木などが植えられていたら良い感じになるだろうと、そんな単純な思いで私はクリス君に竹を切ってくれるように頼んだのです。彼は一生懸命に竹を切ってくれました。

彼が毎日切り続けた竹は膨大な量でした。そこで檀家さんにも奉仕してもらい、これを片付けました。すると昼も暗く深いと思っていた山は意外に浅く、わがもの顔ではびこっていた竹がなくなったことで、木々が生き生きと輝いて見えたのです。年配の檀家さんたちは、「かつてのこのあたりはみなこんな感じだったよ。下草が刈ってあってきれいな山だったんだよな」といっています。寺の山だけでも昔の山ようにしてみたい。木々が生き生きとしている様子を見てみたい。そんな思いが芽生えてきました。

縁あって仏教に出合い、お坊さんになりたいと思ってはるばる真光寺にやって来たクリス君でしたが、日本語も話すことができず、英語が苦手な私や近所の人々と意思の疎通もままなりませんでした。結局四ヶ月ほどたったある日、ホームシックにかかってオーストラリアに帰って行きました。人づてに聞いたところでは、今は結婚して子供もいて幸せに暮らしているそうです。

平成六年の二月に真光寺に住みはじめて以来、私はすっかりさびれていた真光寺を盛んなお寺にするためには、どうしても墓苑の開発が必要だろうと考え、今から思えば少しバブリーだったのかもしれませんが、ミニ墓という構想を抱いていました。なぜ「ミニ墓」なのかというと、墓地不足への不安から墓地需要がまだ強い時期であったので、より多くの檀信徒を呼び込みたかったということもありますが、もう一つ、富士山の裾野の原野が墓地開発によりどんどん失われていくことに疑問を持っていたからです。豊かな自然環境を大規模開発で切り開き、広大な公園墓地をつくってひとりひとりの人間が生きていた痕跡を残すことが、果たして正しいことなのか。小さな土地ですめば、それだけ緑を残すことができる。そんな気持ちから真光寺の土地を生かし、いろいろな工夫をした新しい形の墓苑にできればいいなと漠然と思っていたのです。

ところが真光寺の所有地というのは、寺が衰退した時期に大部分が売り払われてしまったこともあって、ほとんどが昼間も薄暗い荒れ放題の傾斜地ばかりでした。山の上にやや斜度のゆるい土地が三千坪ありましたが、墓地にするには適さない土地ばかりのように思え、いったいどこから手をつければいいのか、考えをめぐらしては行き詰まり、途方にくれるばかりでした。そんな状況の中、数年して本堂の整備がようやく一段落すると、私も本格的に山にはびこる竹との格闘をはじめました。竹を切って燃やしという連続でしたが、下草を刈った森はきれいな花が咲きます。えびねや金ラン、銀ラン、ツリガネソウなど、荒れた山では見ることのできない草花が復活していくのです。以来、それをはげみに七年の歳月をかけて真光寺の裏山を整備した結果、今はきれいな里山へと変貌しています。この里山に、自然と親しめるエリアを作れないだろうか、その一部に自然な形で亡き人を偲ぶ墓があってもいいのではないか。ミニ墓構想は、こうして里山再生構想へと変わっていったのです。

知人に頼まれて戸惑いながらも世話をしたといういきさつもあり、私自身、クリス君の真光寺での体験の意味は果たしてあったのか、長い間、折にふれては自問自答を繰り返してまいりました。けれども、とうてい生かしようもないだろうとあきらめ半分だった真光寺の山が再生へと向かう道を切り開いてくれたのは、ほかでもならぬクリス君だったのだなということを、今は強く感じています。

この「里山」という言葉を最近よく耳にするようになりました。私たちが自然といわれてイメージするのは、まったく人間の手の入っていない原生林だったりしますが、これは悠久の時の流れの中で自然が自ら作り上げたものです。それに対し、人が薪を取り、堆肥を育て、農業を営みながら作り上げてきたのが里山の自然です。里山のおだやかな自然は人ばかりではなく、そこに共生する動植物にも多くの恵をもたらすものでした。ところが時代が変わり、人の手が入らなくなると、こう

した動植物は生きてゆけなくなります。動植物の生態系の変化は農業にさまざまな影響を与えます。害虫、害獣の発生、病気の流行などです。自然の一部である人間が、他の生き物とともに生きていくのに都合の良いように作り上げていった里山の自然は、農業や林業の衰退とともに人々の記憶から消えつつあります。

袖ヶ浦市の外れにある川原井は、そうした里山の名残が割合と残されている場所でした。その中でも真光寺のある新田という地区は、おそらく鎌倉時代あたりに開墾され、かつては「新田二千三百石」といわれ、谷あいに縦横に水田が広がるとても豊かな土地だったそうです。今でもおいしい谷津田（谷あいの田んぼ）の米が取れるというので、地元では有名です。自然環境もすぐれ、オオタカなどの鷹類や、フクロウなど、里山で人と共生していた貴重な動物たちが棲んでいます。しかし臨海工業地区を抱える袖ヶ浦では、若い人はみな工場などに就職して、農業をやる人は少ないのです。特に不便で手のかかる谷の奥の水田に往事の面影はなく、山深い地域を耕作する人はわずか二人のおじいさんで、多くの谷々は荒れ果てています。

「産廃銀座」といわれる市原市の隣にある袖ヶ浦市にも、もう何年も前から東京圏から出た産業廃棄物、特に残土が運び入れられています。かつて美しい水田の広がっていた谷が残土で埋め立てられ、姿を消していくだけでも心が痛みますが、さらに悪いものを混入したり、入れられるだけ運び込んでゴミだらけにしたあげく、企業は倒産して誰も責任をとらないといった光景があちこちにみられます。川原井全体でも何箇所も埋め立てがはじまり、残土でできた平成新山も出現しています。新田地区の谷にもその危機が迫っています。

私は新田地区をできればこんな状態にしたくないのです。もちろん私も加害者です。産廃物は私たちの生活の中から出てきているのです。しかし桃源郷とまではいかないまでも、里山のかつての様子を残す聖域があってもいいのではないか、寺の山を整備しながらそんな思いに駆られてきました。寺のある谷全体を真光寺の鎮守の森であると考えよう、そう思ったのです。

今年の五月の連休、本誌で既報のように真光寺の解放計画を実行に移し、約七十人の人たちが真光寺と周囲の自然を満喫しました。年齢も仕事も考え方も違う人たちが寺に泊まり込み、毎晩酒を飲みながらいろいろな話をする中で、それなら荒れた田んぼを開墾してみようという気運が盛り上がってきました。幸い解放計画で知り合った武蔵工業大学環境情報学部の吉崎先生と、そのゼミの学生さん十五名、地球工作所という指導していた方などがパートナーになってくれることになり、善は急げで早速今年からやってみようじゃないか、ということになりました。

そうは言っても、もう周囲の田んぼでは田植えはほとんど済んでいました。もちろん苗もなければ田植えをする田んぼも真光寺にはありません。檀家の井内さんに相談してみると、たまたま田植え機を新しくしたら効率が上がって苗が大量に余ってしまったとのことで、それを分けてもらえることになりました。田んぼについても新田地区の檀家の人たちに聞いてみたところ、みんな口々に「それならうちの田んぼでやりなよ」と言ってくれました。荒れている田んぼの管理も大変なのだそうです。「あそこの田んぼがいいだろう」

「いや、それよりもこっちだよ」と、私たちの知らないところでも村の人たちの熱い議論がかわされたようで、紆余曲折を経た結果、数年前まで錦鯉の養魚池として利用されていた田んぼを借りることにしました。さらに荒れた一筋の谷全体も無料で借りることができました。ここから私たちの田んぼとの格闘が始まります。

まずは養魚場になっていた田んぼを水平にすることからはじめました。かつて寺の敷地整備で活躍してくれた中古のショベルカーは壊れて廃車になっていたので、手でやる以外に方法がありません。十五名の学生を始めとする協力者たちの手で、まる四日間を費やして、スコップと一輪車でおおむね八畝（二百四十坪）の田んぼの内の、七割をだいたい水平にしました。中心部に十畳ほどの深いところが残ってしまいましたが、これは来年の楽しみに回すことにしました。

水を入れる前の粗起こしが終わると、次は水入れです。養魚場として使用していた時にはポンプで上げた井戸水をビニールパイプで入れていましたが、養魚場が倒産し、使われなくなったポンプはもう壊れていたので田んぼの横の小さな川から水を上げるしかありません。そこで土のうを組んで小さなダムを造り、十センチのビニール管を入れて田んぼに水が入るように作りました。水量調節ができるよう、排水も色々考えてビニール管を使って工夫しました。しかし川に流れている水はわずかで、正直に言えば「これで田んぼができる

のかな」といった感じでした。

幸い田んぼを水平にしたその夜、恵の雨が降り出しました。うきうきして次の日の朝行ってみると、川は増水し激流になっていて、田んぼは水深五十センチもあるかという湖になっていました。近所の農家のおじさんが駆けつけてくれて、その指導を受けながら、給排水の改善をして、水を排水しながら代掻きをしました。トンボというT字の棒でドロドロになりながら泥を動かしましたが、なかなか思うように行きませんでした。

さて五月二十二日、井内さん親子の協力と、学生五名の助っ人を得て、いよいよ田植えをすることになりました。井内さんは耕運機の後ろに丸太をつけて、田んぼをぐんぐん水平にしていきます。どうしても高いところはベニヤを耕運機につけて、土を乗せ、泥の上をそりのように滑らせて、深いところに沈めていきます。人力頼りでトンボで少しずつ動かした数十倍の勢いで水平にならしていきました。さすがに餅は餅屋です。この日は代掻きのみで、次の日に田植えをしました。普通は代掻きから一週間あけて土が固まってから稲を植えますが、時期の問題と苗のこともあり、無理やり田植えをし、とりあえず私たちの田んぼは完成しました。

その後もこの田の給排水には、悩み続けています。湖にすること二度、干し上がること四度、今も上手くいっていません。長年使っていなかった田んぼはどこかおかしくなっていて、水もれしているようです。これからの問題です。

思い立ったが吉日で、ともかく無我夢中で動き回って田植えを終わりました。この間、村の人たちはとても好意的でした。道具を貸してくれたり、見に来てはアドバイスをくれたり、手伝ってくれたりしました。そこには生まれ育った土地が荒れていくことに対して、何とかしたいという願いがあるように感じました。

それにしても稲作というのは奥が深いものです。田んぼの構造から、水との関係など、学ぶことだらけです。昔の人たちが長い年月をかけて築き上げた技術の集大成が、田の文化なのだとつくづく実感します。そしてにわか仕込みではありますが、すこしでも先人の知恵を学んでゆきたいと考えています。そしてそれを多くの人と共感していきたいのです。手をつけたばかりですが、荒れている谷をきれいにして、全ての谷あいに水がいきわたり、山の下草を刈って、木々に光が届くようになったこの谷を、上から見たらきれいだろうなと空想しています。

そこに住む動物、植物、そして人間を、お釈迦様が笑顔で見守る真光寺の鎮守の森の完成を夢見ています。

この文章は平成十六年七月発行　東長寺寺報　『萬亀ｖｏｌ．７３』に掲載されたものです。

寺のある暮らし（忘年会）

一泊二日にて、お寺でゆっくりと過ごしていただくイベントです。朝のお勤めと食事、就寝以外は自由です。お気軽にご参加下さい。

日　程　十二月十二日（木）午前十一時集合
　　～　十三日（金）午後一時解散
参加費　八千円　（一泊 四食）

～大本山永平寺参拝と飛騨高山の旅～

本年は『大本山永平寺』参拝を企画いたしました。大本山の朝のお勤めに参加して250名余りの修行僧による読経を全身で感じてみませんか？一般参拝では入ることのできない建物や法要にぜひご参加ください。真光寺団体参拝の特別供養も行われます。1日目は永平寺の宿坊（吉祥閣）に泊まり、2日目は『飛騨高山温泉』にてゆっくりと日頃の疲れを癒やしていただきたいと思います。

檀信徒の皆様、縁の会の皆様、またご縁者の方でも結構です。たくさんのご参加をお待ちしております。

日　　時　平成２５年１１月２４日（日）～
　　２６日（火）　２泊３日
募集人数　３５名（最少催行人数２０名）
旅行代金　６０，０００円　（供養料含む）
コ ー ス
１日目　千葉駅（6:15発）→真光寺（7:00）→
　　羽田空港（8:00）→別紙ご案内を参照→
３日目　飛騨高山→東京駅（17:45着）→
　　千葉駅（18:45着）→真光寺（19:30着）

行事予定

［檀信徒］

◇八月九日（金）『山門大施食』
午後二時　説教
午後三時　第一座　新盆施食法要
第二座　山門大施食会法要
例年通り施食会法要を行います。新盆家ほか、先祖代々以外のお塔婆は事前に申込み下さい。

◇九月二十二日（日）『秋季彼岸法要』
午後二時より　お彼岸のご供養を致します。
法要後には津軽三味線を予定しています。

◇十一月二十四日（日）～二十六日（火）
『団体参拝旅行』（縁の会合同）
住職同行のお寺の旅行です。今年は大本山永平寺に参拝いたします。たくさんのご参加をお待ちしています。

［お寺掃除］
◇六月三十日（日）　表場下　表場上
◇八月四日（日）　根澄山　台　新田

［ご詠歌練習日］
七月九日・二十三日　八月六日
九月三日・二十四日　十月八日・二十二日
十一月十二日・二十八日　十二月十日
場所　真光寺
時間　八時より（十月から四月までは七時半より）
※縁の会会員も参加できます。気軽にお問い合わせください。

2013 平成25年 行事予定表

■黒字　檀信徒　■青字　上総自然学校
■緑字　縁の会　■赤字檀信徒・縁の会合同

7			8			9			10			11			12		
1	月		1	木		1	日	赤米稲刈り・坐禅	1	火		1	金		1	日	
2	火		2	金		2	月		2	水		2	土		2	月	
3	水		3	土	七日法要(盆施食)	3	火		3	木		3	日	縁の会定例総会	3	火	
4	木		4	日		4	水		4	金		4	月		4	水	
5	金		5	月	昆虫ナイトハイク	5	木		5	土	ライブストック	5	火		5	木	
6	土		6	火		6	金		6	日		6	水		6	金	
7	日	七日法要(盆施食)	7	水		7	土	七日法要	7	月	七日法要	7	木		7	土	七日法要(大掃除)
8	月		8	木		8	日		8	火		8	金		8	日	
9	火		9	金	山門施食	9	月		9	水		9	土		9	月	
10	水		10	土		10	火		10	木		10	日		10	火	
11	木		11	日		11	水		11	金		11	月		11	水	
12	金		12	月		12	木		12	土	収穫祭①	12	火		12	木	忘年会
13	土	草取り＆夜の昆虫探し	13	火		13	金		13	日	収穫祭②	13	水		13	金	
14	日	草取り＆夜の昆虫探し	14	水		14	土	稲刈①	14	月		14	木		14	土	しめ縄でお飾り
15	月		15	木		15	日	稲刈②	15	火		15	金		15	日	
16	火		16	金		16	月		16	水		16	土	干し柿作り	16	月	
17	水		17	土		17	火		17	木		17	日	紫米稲刈＆ヨガ	17	火	
18	木		18	日		18	水		18	金		18	月		18	水	
19	金		19	月		19	木		19	土		19	火		19	木	
20	土		20	火		20	金		20	日		20	水		20	金	
21	日		21	水		21	土		21	月		21	木		21	土	
22	月		22	木		22	日	山門彼岸会	22	火		22	金		22	日	
23	火		23	金		23	月	縁の会彼岸法会	23	水		23	土		23	月	
24	水		24	土		24	火		24	木		24	日	団参旅行(永平寺)	24	火	
25	木		25	日		25	水		25	金		25	月	団参旅行(永平寺)	25	水	
26	金		26	月		26	木		26	土	さつまいも掘り	26	火	団参旅行(永平寺)	26	木	
27	土	里山昆虫探し	27	火		27	金		27	日		27	水		27	金	
28	日		28	水		28	土		28	月		28	木		28	土	
29	月		29	木		29	日		29	火		29	金		29	日	
30	火		30	金		30	月		30	水		30	土		30	月	
31	水	里山昆虫探し	31	土					31	木					31	火	

縁の会施食（せじき）法要のご案内

７月は７日法要の午後開催、８月は授戒式を行わず午前・午後入れ替え制にて施食法要を修行いたします。厳しい暑さの時期ではございますが近在の寺院僧侶をお迎えし、先祖代々のご供養、故人のご供養、新盆精霊のご供養、両親縁者など、皆様のご供養を行います。また、今年新盆にあたる精霊には特別にご供養をいたしますので縁者の方は特にご参加下さいますようお願いいたします。

◇７月７日◇
１１時００分　授戒式
　　月例供養
１３時００分　施食法要

◇８月３日◇
午前の部
１０時３０分　受付
１１時００分　法要

◇８月３日◇
午後の部
１３時００分　受付
１３寺３０分　法要

●申込み事項
①出席者のお名前、人数、お弁当の数
②出席の日時
③お迎えの有無（午前、午後）
　お迎えの時間は別紙『施食会送迎案内』をご参照ください。
④卒塔婆の有無（1本　2,000円）
　花塔婆の申込みは事前にFAXまたは電話で申込み下さい。
　申込みの際は、故人の戒名または俗名、または〇〇家先祖代々、塔婆を建てる方の施主名をお知らせください。
●供養料
⑤施食回向料　　随意（5,000円～10,000円程度）昼食お弁当のご用意がございます
⑥新盆施食回向料　随意（30,000円程度）

ご自宅での新盆供養または、棚経を希望される方

ご自宅へ僧侶が伺いご供養いたしますので、希望の日付・時間をお知らせ下さい。

行事予定

［縁の会会員］

◇七月七日（日）七日法要　午前十一時より授戒式、月例供養
　午後一時より施食法要
◇八月三日（土）縁の会施食法要
　上記の日程で修行致します。東京駅よりバスを運行致しますので、別紙『施食会送迎案内』をご参照下さいさい。
◇九月七日（土）七日法要　午前十一時より授戒式、月例供養
　午後は坐禅と写経・写佛
◇九月二十三日（月）縁の会彼岸法要　午前の部　十一時より法要
　午後の部　一時半より法要
◇十月七日（月）七日法要　九月と同じ日程です。
◇十一月三日（日）縁の会総会　九月下旬頃に総会の詳細案内を送付致します。
◇十一月二十四日（日）～二十六日（火）
　団体参拝旅行　大本山永平寺～飛騨高山の旅
◇十二月七日（土）七日法要　『大掃除』
　午前十一時より授戒式、月例供養
　午後は大掃除を行います。

※縁の会行事は昼食準備の都合上、事前にお電話かファックス等でお申し込み下さい。

送迎案内【七日法要】
□電車の方
　JR内房線「袖ヶ浦駅」10時10分着
□バスの方
【土日祝】
・品川発9時30分→袖ヶ浦BT10時17分着
・横浜発9時30分→袖ヶ浦BT10時09分着
・川崎発9時25分→袖ヶ浦BT10時14分着
・新宿発9時05分→袖ヶ浦BT10時08分着
【平　日】
・品川発9時25分→袖ヶ浦BT10時12分着
・横浜発9時30分→袖ヶ浦BT10時09分着
・川崎発9時15分→袖ヶ浦BT10時04分着
・新宿発9時05分→袖ヶ浦BT10時08分着
□お車の方
　10時40分頃までにお越し下さい。

各種お申込み連絡先
真光寺　〒299-0201　千葉県袖ヶ浦市川原井634
TEL　0438-75-7414（代表）　TEL　0438-75-7365（縁の会事務局）　FAX　0438-75-7630
e-mail　ennokai@shinko-ji.jp（縁の会）　satoyama@shinko-ji.jp（上総自然学校）